

活動報告：ぶんぶんクラブ

1. 「ぶんぶんクラブ」のねらい

地域子育て支援が叫ばれる中、我が国における、「子育て支援事業」「次世代育成事業」は新たな転換期をむかえようとしている。そこには、“地域”をキーワードとした、世代を超えた関わりが見据えられ、地域で乳幼児から児童・中高生を育てよう、次に子どもを産む世代である青年を支援していこうという動きがある。この「ぶんぶんクラブ」もこうした時代の流れにねらいを定めたものである。

「ぶんぶんクラブ」は、広島市安佐南区長束地域を中心に、そこに居住する児童とそこに学ぶ大学生が日常的にふれあうことを目的としている。児童は、学校時間外の夕方、保護者の帰宅を待つ間であってもより充実した生活が提供され、大学生は児童と日常的に接することにより、子ども・子育てへのリアリティを体感することができる。さらに、小学生・大学生が地域の互いの学校に出入りすることにより、地域に開かれた学校が築かれ、地域で見守る学校、様々な世代が交流する学校をめざし、地域の安全面の向上、治安維持に貢献するものとして期待される。

2. これまでの活動状況

これまで、「ぶんぶんクラブ」では、地域の児童館の協力を得て、児童との交流を中心とした活動を展開してきた。2010年度1年間の活動状況を以下に示す。

- ・ 6月～：児童館との交流交渉
- ・ 7月：児童館主催の七夕イベントに大学生が参加、小学生へ劇を披露する
- ・ 10月～：児童館の協力のもと、スタッフ1名(教職免許を有する本学園OB)と学生ボランティア(交代で随時4名程度)が週1回(主に木曜日)、児童館における児童との交流をはじめ
- ・ 12月：児童館における音楽学科演奏を含むクリスマスコンサート
- ・ 3月：学生ボランティアがレクリエーション・ボランティア研究会としてサークルを発足、スタッフ1名とサークルが組織

的に「ぶんぶんクラブ」の活動を行う

当初は、センター内にて放課後児童クラブを開設する計画もあったが、児童の日常生活を維持した形での学校間交流をめざし、ぶんぶんクラブメンバーが児童館へ行き交流する活動をはじめた。これまで、日常的な交流は3月31日までに19回行われ、宿題指導、遊び、をはじめ卓球指導や一輪車指導などを中心に児童と大学生の交流が深まっている。児童館スタッフからも交流に対する高い評価をいただいております、今後さらなる展開が期待できる。

3. ボランティア学生の変化

さて、「ぶんぶんクラブ」は、主にボランティア学生、とりわけレクリエーション・ボランティア研究会のメンバーを中心に活動がなされている。学生は、児童館での交流後、大学へ戻り、反省や感想を記述しカンファレンスを行っている。カンファレンスにはスタッフや教員も同席する場合があります、学生の記述、発言に目覚ましい成長を垣間見ている。

それでは、以下より交流に関する反省・感想の記述について変化を記していく。

まずはじめに、交流に関する反省・感想の記述について、内容別にカテゴリー分類し、月ごとに集計したものをFigureに示す。

Figureにおいて、「子どもの状況」：子どもの活動している状況に関する記述、「子どもの変化」：前回と比較した子どもの変化に関する記述、「子どもの年齢的特徴」：他の年齢との比較や、児童の発達に関する記述、「自分の感情」：子どもと接して感じていたことに関する記述、「今後の対策」：次回へ向けての改善点に関する記述、を示している。なお、グラフの高さは、月ごとに記された反省・感想の記述のうちどの程度各内容の記述がなされていたかの割合を示している。

Figureの結果より、学生は交流を重ねるにつれて、単なる「子どもの状況」に関する記述にとどまることなく、「子どもの変化」や「子どもの年齢的特徴」に目をむけるようになっていっていることがわかった。さらに、「子どもの変化」に対する「自分の感情」についても記述することが多

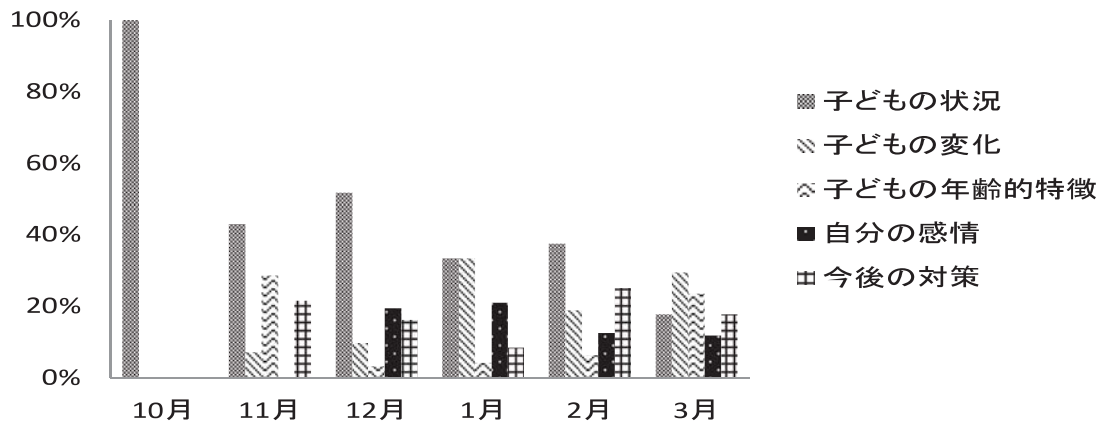


Figure. 大学生による交流に関する感想の月別変化

くなり、子どもと自分との関係を意識した内容を記すようになっていった。日常的に習慣化された交流により、単なる子どもとのふれあいから、子どもとの関係構築へと交流の質を変化させ、子どもをより深く理解していく姿勢があらわれたものと考えられる。

以上のことから、大学生にとって、子どもの日常に飛び込み、その中で自分の役目を見つけながら子どもとの関係を継続的に深めることは、子どもに関する深い洞察と、よりリアリティを持った子ども・子育て感覚を培うものになることが示唆された。今後、子どもの活動の充実度を共に調査し、学生の子ども観の変遷と子どもの放課後活動の変化との関係を模索していく必要がある。

4. スタッフの役割

上述のとおり、学生は「ぶんぶんクラブ」の活動を通して、子ども観を見つめていく様子が見られた。そこには、児童館のスタッフの皆様、子ども達はもちろんのこと、ぶんぶんクラブスタッフ1名の関わりも大きく貢献している。

このスタッフ1名は、学生ボランティアと同年代の、教職免許を有する学園のOB(女性)である。児童館との情報交換・連携、学生と児童館との交流のまとめ役として大きな役割を果たしている。学生も、教員ではない同年代のスタッフと作り上げるボランティア体制に自立心を持って取り組んでいる様子がみられる。さらに、児童館との関わりにおいてもゆっくりと関係を築いており、交流のスムーズさに貢献していると考えられる。

なお、スタッフは、学生ボランティアが記す活

動記録を点検し次の活動の提案・子どもへの注意点などを教員と共に考え指導する役割も果たしており、教職免許を有するよき先輩として安全面を考慮したボランティア体制の設立に尽力している。

5. 今後の課題と将来構想

現在、児童館の全面的な協力のもと積極的な交流が行われている。学生と子どもたちとの関係も深まりつつあり、地域の子どもたちと学生をつなぐという当初の目的を徐々に達成していていると思われる。

しかし、今後の発展に向けて問題点もいくつかあげられる。まず一つ目には、学生が児童および放課後について学び、児童のために新たな遊びの展開、放課後の過ごし方の可能性を提供していくことである。現在は、学生が児童館の活動の中で交流させていただくことが主流になっている。大学生が関わることで、新たな遊びが生まれ、放課後活動がより活発になり、次の日の活力につながる可能性を探る必要がある。

次に、児童が大学へ自由に足を運べる日常をうむことである。現在、安全面を考慮し、大学生が小学校へ出向く形で交流をすすめている。しかし、大学には大学ならではの施設、資源があり、その大学へ児童が自由に入出入りすることが可能になれば、新たな放課後の過ごし方が模索できるものと思われる。例えば、音楽学科との音楽教室をはじめとして、音楽・図工などの放課後特別教室を開講するなど、大学資源を利用したダイナミックな体験活動を行なうことも大切な試みであると

思われる。

また、上記の提案と関連して大学・小学校がともに安全環境を作り、地域に対してオープンな施設になっていく道を探すこともまた、大切な課題である。「ぶんぶんクラブ」の本来の目的は“地域子育て支援”の模索にある。児童・大学生のみならず、地域の様々な世代が小学校・大学に日常的に出入りし、その中で子育ての様々なサポートがなされる必要がある。そのためには、子どもの安全を守る活動等（学生による夕方見守り隊など）も視野に入れ、学生・スタッフが共に、安全と信頼のもと地域と関わるスキルを向上させていくことも目標としてかけなければならない。

乳幼児親子の子育て支援とともに、その先にある児童・思春期・青年を対象とした子育て支援が発展していく必要がある今、地域の中で安全に開かれた小学校と大学が、ともに多世代交流の拠点となり、地域の集いの場となることを目指していければと考える。

最後に、先述のとおり、大学生は日常的な児童館との交流により、子ども・子育てのリアリティを獲得していている様子が見受けられた。この「ぶんぶんクラブ」を中心に、大学生という次世代の子育てパワーを活用し、『子育てしたい街づくり』を大学から発信していくことが望まれる。

（文責：学芸学部子ども学科 若林紀乃）